

●与謝野光・新聞進一編集
与謝野晶子選集Ⅱ



春秋社版

略 歴

よさのひかる
与謝野光

明治36年1月、与謝野寛・晶子の長男として東京に生まる。大正15年慶大医学部卒業。厚生省公衆衛生院教授、東京都防疫課長、東京都衛生局長等を歴任、現在東京医科大学理事同大学高等看護学校校長、慶大文学部講師。医学博士。第三次『明星』主宰。

しんましんいち
新聞進一

住所—東京都渋谷区渋谷1丁目15の9の308
大正6年9月東京都に生まる。昭和15年東大文学部国文学科卒業。北大助教授、文部省教科書調査官を経て、現在青山学院大学教授。専攻——中世歌謡、近代短歌。著書『歌謡史の研究』『明治大正短歌史』その他。
住所—東京都日野市南平1473の142

晶子詩歌集

〔与謝野晶子選集・2〕

昭和42年12月25日 第1刷発行

定価 ￥300

検印
省略

編 者

与 謝 野 光
新 間 進 一

発 行 者

東京都千代田区外神田2の18
鷺 尾 貢

印 刷 者

東京都台東区寿3の13の13
市川印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式会社 春 秋 社
外神田2の18

電話 (255) 9611～5 振替 東京 24861

(徳住製本) 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

N. D. C. 918

目次

短歌

さくら草	三八首……………	九
朱葉集	四八首……………	三
舞ごろも	一八首……………	八
晶子新集	二六首……………	三
火の鳥	五七首……………	二四
太陽と薔薇	五六首……………	三〇
草の夢	三五首……………	三六
流星の道	三七首……………	四三

瑠璃光	四七首……………	四
心の遠景	七八首……………	五
霧島の歌	一八首……………	六
満蒙遊記	一八首……………	三
与謝野晶子全集 第五卷	八四首……………	七
与謝野晶子全集 第六卷	七三首……………	八
与謝野晶子全集 第七卷	三六首……………	四
白桜集	一五八首……………	九
総数	八二七首	

詩 編

よしあし草 十一号

春月……………二五

明星 十一号

朝がすみ……………二六

毒草

つみびと……………二六

ひとち琴……………二九

橘媛……………三〇

恋衣

君死にたまふことなかれ……………二三

恋ふるとで……………二六

いかが語らむ……………二六

鼓いだけば……………二七

しら玉の……………二六

冥府のくら戸は……………二九

芸苑 二年四号

親の家……………三〇

一隅より

故郷……………二三

男……………二三

男の胸……………二四

月見草……………二五

伴奏……………二六

母ごころ……………二七

夏より秋へ

山の動く日	一三八
一人称	一三八
乱れ髪	一三八
剃刀	一三八
女	一三八
我歌	一四〇
すいっちょ	一四〇
わが心	一四〇
読後	一四一
秋	一四二
或国	一四三
ひとり寝	一四三
初夏	一四五
旅に立つ	一四七
子等に	一四八
セエヌ川	一四九

坂本紅蓮洞さん	一五〇
---------	-----

巴里より

ノオトル・ダム	一五一
---------	-----

さくら草

アウギユストの一撃	一五三
五月の歌	一五五
日曜の朝飯	一五七
颱風	一五九
晩秋	一六一
街	一六三
産室の夜明	一六五

舞ころも

第一の陣痛	一六七
フォンテンブローの森にて	一六八

ミюнヘンの宿……………	一七〇
駄獣の群……………	一七一

我等何を求むるか

夏の歌……………	一七三
或日の淋しさ……………	一七四

愛・理性及び勇氣

詩に就ての願ひ……………	一七五
冷たい夕飯……………	一七六

若き友へ

価値……………	一七九
恋……………	一七九
雑草……………	一八〇

心頭雑草

母の文……………	一八〇
----------	-----

晶子詩篇全集

小鳥の巢(抄)……………	一八三
五月の海……………	一八六
三等局集配人(押韻)……………	一八七

優勝者となれ

紅顔の死……………	一八八
-----------	-----

『晶子詩歌集』出典一覽……………	一九一
母晶子について……………	与謝野 光…二九五
晶子の詩歌——大正・昭和期の短歌と、生涯の詩業……………	新聞 進一…二〇三

晶子詩歌集

凡 例

一、本巻には、第一巻『晶子歌集』につづく短歌作品の外、初期から中年までの詩の選抄を試みた。

一、短歌の部には、第十二歌集『さくら草』から、歿後編まれた『白桜集』までの単行本・全集所収の歌集に基き、大正・昭和期の短歌作品の主要なものを収録した。

一、紙数の都合で、第一巻に比べて各歌集の採録歌数を減じた。殊に昭和期のものは大幅に減らした。なお、晶子の自選歌集を参照したことは、第一巻と同様である。

一、歌集をほぼ三つごとに区切つて、まとめて注をつけておいた。注のつけ方は第一巻に準ずる。

一、詩編の部には、単行本初出尊重の建前から、詩歌集・随想集に合わせ収められた作品を採り、各集の刊行年代順に排列した。なお、若干、雑誌から直接採録したものもある。なお、『二隅より』・『夏より秋へ』に所収の詩は初出の際に題名を欠いているため、『晶子詩篇全集』本によって補った。

一、詩の注は、各作品の末尾に、適宜付記した。

一、短歌・詩の表記は、なるべく原文のままとし、ルビは適宜増減した。口語詩の場合も歴史的仮名遣に従った。

一、本巻には、特に与謝野光執筆の思い出の一文を加えた。

さくら草

この頃のわが衰へを美しくと見るすべ時にうち忘れつつ

かばかりもなよなよとせる心をば浪華なには育ちの傷きずに思へり

やるせなさこれは女のやるせなさ男の云へるそれに似たらず

女にて身に沁む手紙書く人を思ひ出でつつ川の岸行く

花かをり鼠ことことの噛める春の夜明のなまめかしけれ

文書ふみかけながなが書けと促しぬうすくれなるのわが桜草

その恋は横堀川よこぼりがはの柳(1)よりつばめの出づる趣おもむきに似し

四月来ぬ紺のはんてん着るつばめ憎きことなど云ひそなつばめ

うす色の牡丹の花のちるけはひ身に覚えつつ文かくわれは
わが壁に紅の唐紙を張りたれば寝ても寝ずとも君が夢見ゆ
春の朝春のまひるも夕ぐれも淋しさつづくおのれとなりぬ
恋すれば若き巻葉の中に寝てほのかに朝の風吸ふごとし
くれなゐの桃のつぼみを思ひつつ薬をのみぬ病める三月

樽と樽中に二尺の板渡し草あそびせし春のおもひで

恋ならず仇にあらで友よりも忘れがたき人にもあるかな

身の中に悲みの湧く筋などのあるこちして手をながめ居ぬ

船に居て陸に着く日を思ふごと恋醒むる日のにきに思はる

よきことは君に教へて世の常の女となりぬ恋もあさまし

今ひと度^{たび}西の都の元朝^{ぐわんてう}を緋の帯しめてわれに練^ねらしめ

うち日⁽²⁾さす都の春の噴水の白きさまこそめでたかりけれ

いにしへの恋の反古など君と読む正月の夜の炉のほとりかな

大空の日の面^{おもて}をば濡らすごと菜の花に降る春の雨かな

十歳^{とせ}のわれ狐のまねし膝つきぬばらと咲く菜の花の畑

夏来る肌のましろき三つ四つの男の子見ゆよき若衆見ゆ

この頃のもの苗よりやはらかに心は君を思へるものを

いのちなど粟粒^{あはつぶ}ほどのはかなさに見ゆる日つづき人を恋ひ居り

心いと正しき人がいかさまにいつはるべきと思ひみだるる

白き鶏髻^{とりけし}粟のつぼみをついばみぬわがごと夢に酔はんとすらん

心中をせんと泣けるや雨の日の白きこすもす紅きこすもす

静かなる風のながれのこちよさ十一月の黒檀こくたんの夜よる

若くして思ひしことの目に見ゆれ白き扇をもてあそびつつ

わが二十町娘はたちにてありし日のおもかげつくる水引の花

やがて着ん秋の袷の思はれぬかはたれ時にしら雲飛べば

みづからを四月しぐわつ尽きたる春のごと美しくくはたかなしくぞ見る

恋と云ふ美しくしきもの見る心漸くたゆし何に行かまし

小鳥きて少女のやうに身を洗ふ木かげの秋の水だまりかな

老いぬらん去年こぞ一昨年ととしの唯ごとのそのなつかしさ極りもなし

日のくれは君の恋しやなつかしや息ふさがるるこちこそすれ

朱葉集

何す^{をちかた}とや遠方に居て知ることこの世ばかりのことに終るな

黄昏^{たそがれ}は恋をしたれば汝^なをめぐる光を断つと脅^{おど}す如^{ごと}(3)こし

香木^{かうぼく}の朽^くちし香^{には}ひを立つるなり黒き茸^{きのこ}も白ききのこも

ついと去りついと近づく赤とんぼ憎き男の赤とんぼかな

空樽^{あきだる}の中より出でし大やんま雲に入る時夕風ぞ吹く

くちびるの鏡にあるは自らの吸ふならねどもなつかしきかな

ある男深夜の家に帰りしと書けば長しや桐壺よりも

いろいろの小さき鳥に瞬^{かへ}化りなばうれしからましこの銀杏^{いんぎょ}の実

もの脅すけうとき性のこの君は周防の山を見むとてぞ行く

幼き日船より塔を見つること二十の夏に君を見しこと

源氏をば十二三にて読みしのち思はれじとぞ見つれ男を

叔母達と小豆を選びしかたはらにしら菊咲きし家のおもひで

在るはこれ蜂蜜色の秋風とましろの花と恋ざめごころ

せつなかる愛欲おぼゆ手に触れしおのれの髪の毛のやはらかさより

落日はつよき力をうち忘れ女のごとく恋のみに燃ゆ

白麻のしとねに寝れば秋風に抱かれて臥すこちこそすれ

後ろより蔵塗りながら物云ひし叔父など見ゆるみそはぎの花

木の箱に烙印を押す従兄をば見つつ弾くなる昼の三味線